

第5回流山市生きづらさ包括支援の在り方懇談会 議事要旨

(日時) 令和5年3月22日(水) 9:00~12:00

(場所) 流山市ケアセンター 4階 第1研修室

(出席) 勝本委員、今成委員、中田委員、関根委員、田中委員、石川委員、
田熊委員

(事務局) 流山市 中川健康福祉政策室長、その他市職員

<議事案件>

- 事務局説明(プロジェクトチーム検討案)
- プロジェクトチーム検討案を踏まえた課題整理

<懇談会における主な意見>

- 総合相談機能を市役所におくか、地域におくかは別として、住民の信頼と安心が得られる相談体制が必要。
- 市民がどこに相談すれば対応してもらえるのかと考えると、より望ましいのはどちらか、足りないのはどこか
- 相談をしに行った人が、どこで受け止めてもらい、助言を受け、助けを求めるか。また、全く相談に来ない人を見つけ出し、支援につなげていくか。どのように地域に受け入れてもらえるような方向にできるか。
- アウトリーチ支援は分野ごとに行われることもあり得、それぞれ連携を取っていくことが想定される。
- 初期の段階でモニタリング・アセスメント・インテークが行えれば、専門分野につなげてしまえるのでは。最初の相談でアセスメントがしっかりできれば、そのあとの多機関協働者やアウトリーチ支援事業者等が行わなければいけない事例は少なくなるのでは。
- 多機関協働が処理するケースは単純ではないはずなので、支援会議につなげることが出てくるはず。内部調整等は委託のコーディネーターでは難しいと思う。
- 多機関協働の会議が機能するのが肝であると考える。
- 窓口の在り方については、何を重視するかが重要。
- 窓口については、広く広告をし、アドバルーンを上げるのがいい。また、困難ケースを受ける、対応することを想定して、しっかりアセスメント・インテークできるものを置いた方がよい。相談しやすく、安定的な専門家の配置が重要。
- 地域に身近な相談窓口を置く場合、各分野から1か所ずつ委託するなどの方法も考えられる。各分野で窓口を置くことによって、各分野での連携も取りやすいのでは。
- 市(多機関協働)と(地域の身近な)相談窓口のつながりをとても強くすると心強い。
- 情報集約が負担にならないよう、中央に情報を上げやすい仕組み、システムがあるといいのではないか。
- 少なくとも適切に繋ぎ先を振り分けられるような窓口があると心強い。

- 市民が相談しやすい看板をわかりやすく上げる。市役所にも地域にも拠点的にあったほうがよい。システムの問題もかなり重要、一極集中しないように。官民連携、一体的にやっていくのが有効。
- 関係機関との連携体制構築についても取り組めるとよい
- 先進市町村に伺ったところ、相談の90%はおおよそ1年でめどが立ち、10%はなかなか解決できないというもの。流山市もだいたいおなじようになるのではないか。
- 相談できない、現状で対応できない人々を支援にどれだけつなげられるかが重要。
- 他の先進市町村においても、参加支援事業やアウトリーチは、再度検討中とのことであった。それほど市にとって大きな事業であり、異質な事業であると思う。市を挙げて取り組むことはとても重要。
- 重層的支援体制整備事業は、国がいろんな施策をした中でも特殊な形式。事業を展開する中で不都合があれば修正してよいと国からのアナウンスがあるということは、不都合は想定のうちということ。やっていく中で不都合が出た場合は、増改築して望ましい形に持っていくという事業だと思う。
- 役割の明確化が必要と思う。相談する市民からすると、看板の挙げ方は大事だが、その人がずっと伴走するのも大変なので、きちんと繋ぐ、初動の時は一緒に動くなどのシステム作りと役割分担を整理する必要がある。
- 各業務を担う団体が別であったとしても、役割が分散しないことが重要。多機関協働の部署が統括できる体制・仕組みなのか考えていく必要がある。一体的に結びつきが弱まらないような、まとまり感が専門家にも市民にもわかるように作るべき。
- 参加支援が重層事業の理念を象徴していると思うが、苦慮している市町村は少なくなっているのでは。大事な部分ではあると思うので、機能などの整理ができるといい。
- 参加支援事業は、難しい方たちの居場所を考えることから、かなりチャレンジング。地域の問題リスト化と情報のつながりをまとめていけば、ミスマッチングのみの人は繋がられると思うが、将来的には業者や一般の事業者がコラボできるようなものができたらうれしい。
- 各取組についてフィードバックを得て修正していく。やり始めた後の評価会議が大切だと思う。
- 事業の評価について、誰を対象に何をしてどういう結果を想定するのか、ロジック的なモデルがあった方がよい。評価指標を出し、定期的な評価を合わせて考えるとよい。
- 厚労省の資料に、国民の数がますます減っていき、一人暮らしが多くなり、横の連携が薄く、地域がスカスカになっていく。こういう状況の中で、困難な人をどうやって助けたいかということを考え、生み出されたのがこの体制。地域づくりと参加支援について、地域にフィットしたものを作ってほしい、という狙いなのかと考える。流山市の特性をだせるとしたら、ここで色合いが出せると思う。
- 今現在困っている人を助けることも大事だが、将来困る人を増やさない仕組みを作ることが必要。
- 地域の特色というと、子どもがとっても増えているところ。不登校のうち、半分が支援に繋がっていない可能性がある。子どもの成長をどう保証していくかが重要。